大阪公立大学
Osaka Metropolitan University
学術情報リポジトリ

分節的牧畜社会における権力（一）：エチオピア西南部クシ系農耕牧畜民ダサネチにおける生業システムと権力に関する考察

メタデータ	言語: jpn
	出版者:
	公開日: 2010-08-09
	キーワード (Ja):
	キーワード (En):
	作成者: 宮脇, 幸生
	メールアドレス:
	所属:
URL	https://doi.org/10.24729/00006331

分節的牧畜社会における権力（一）

――エチオピア西南部クシ系農耕牧畜民ダサネチにおける生業システムと権力に関する考察――

宮脇幸生

問題設定

「未開社会」における「権力」とは？

こうした問いにたいするアプローチとして、A.「権力」の正当化装置としての神話や儀礼のエスノ・ロジックの理解を通して「権力」の本質をとらえようとする社会の「上部構造」からのアプローチと、B. その社会のおかれた生態的条件とそれに適応した生業システムの分析を通して「権力」という社会的現象を考える「下部構造」からのアプローチが考えられる。本論は、理論的にはマーシャル・サーリンズらによって呈示された「新進化論」の発展図式と、その中の「部族社会」レヴェルにみられるとされる「家族制生産様式」に関する議論を手掛かりにして、「下部構造」からのアプローチによって考察を進める。考察の対象として、ウリ・アルマゴールによって調査されたエチオピア西南部のクシ系農耕牧畜民ダサネチの生業システムとその社会構造をとりあげる。

サーリンズの初期の進化論的な図式によれば、未開社会は最も単純な「バンド」レヴェルから、分節的な「部族社会」レヴェルをへて、首長によって統合された「首長制社会」のレヴェルに至るという。それぞれの発展段階は、社会の規模、統合の程度、統合に寄与する権力の強さの程度と相関する。首長制社会は、これらの段階のうちで最も大規模で、首長の権力によって最も良く統合された社会である。サーリンズは後に、異なる二つの段階として分けられていた分節的社会と首長制社会を共に「部族社会」とし、こうした社会に一般的にみられる生産様式を「家族制生産様式」と名づけた。

サーリンズの提示した「家族制生産様式」の理念型は、未開社会における権力（首長制あるいは王権）の基盤を、生態的条件と、それに適応した生産様式（生業システム）に関連づけて分析しうる可能性を示している点で、非常に興味深いものである。けれども他方で、以前には区別されていた分節的な社会と首長制社会を共に「部族社会」に一括し、それに「家族制生産様式」という単一の生産様式概念をあてはめてしまったために、両者の間にみられる生業システムの相違、生産様式の相違、それらに関連した権力基盤の相違が曖昧なままに放置されているという難点がある。

本論は、分節的社会レヴェルにあるダサネチの生業システム、生産様式および権力の基盤を詳細に検討する。そして、「家族制生産様式」という概念がこの社会にみられる生産様式にはあてはまらないことを

示す。次いでダサネチの生産様式が、「家族制生産様式」とは異なり、首長制のような強力な権力の生成をはばむ形で機能していることを示す。

以上の議論は、サーリンズの「家族制生産様式」の理論の適用範囲を適切な形で限定するだけでなく、それが示唆している社会の「下部構造」からみた権力の発生基礎の分析という重要なアプローチの方法を、広範に展開するための契機となるものと思う。

1　新進化論の図式と「家族制生産様式」の理論

(1)　新進化論による社会の発展段階

まず始めに、サーリンズ（1960、1961）の議論にそって、「新進化論」の考え方を簡単にまとめてみよう。

「新進化論」は、ハックスリーによる進化生物学を理論的な支点として、ホワイトによる文化の一般的な（あるいは単系的とみなされがちな）進化論と、スチュワードによる多系進化説を統合しようとする試みである。サーリンズによれば、文化の進化には二つの側面がある。特殊進化と一般進化である。特殊進化とは、文化が選択と適応をとおして、特殊な諸文化へと多様化する側面である。それにたいして一般進化とは、より高度な文化形態がより低い文化形態から生じ、それを凌いでいくという側面である。一般進化のレヴェルは、まず利用しうる熱エネルギーの総量によって規定される。より高次の文化は低次の文化よりも環境からより多くのエネルギーを抽出する。さらに構造面においても、高次の文化はより大規模であり、多くの分化した下位体系をもち、それらをより効果的に統合する手段を持つ。

特殊進化の概念と一般進化の概念は、異なった論理のレヴェルにある概念である。特殊進化という概念によって、特定の文化が特定の環境への適応をとおして変化していくプロセスを後づけることができる。それは系統発生的なプロセスであり、個別的な歴史のつみかさねとしてみることができる。それにたいして一般進化は、系統発生的なプロセスでもないし適応の過程でもない。それはまずもって活用される熱エネルギーの量によって区別される諸文化の段階を指し示す概念である。これらの段階は具体的な歴史のコンテクストから切り離して並べられうるのである。

このようにして進化の二つの側面を概念的に区別した後に、サーリンズは「一般進化」における文化形態の発展段階を示す諸類型を設定する。

バンドは最も未発達な段階である。小人数からなる地域集団であり、家族と家族連合からなるバンドという二種類の社会的単位があるにすぎない。統合の程度は低く、家族の政治的・経済的な自律性が強い。旧石器時代の多くの社会、および現代の狩猟採集社会がこの段階にあるとされる。

バンドよりも一段進化したレヴェルにあるのが部族社会である。部族は、部族資源の一定地域を共同で利用し、一年の大半を居住を共にする最小の多家族集団である「一次分節」からなる分節組織である。これらの「一次分節」は一定の時期に集まってより大きなバンド（二次分節）を形成する。部族分節間の関係は対等であり、それぞれは経済的・政治的に自律化の傾向が強い。部族がまとまっているのは、分節間に類似性が存在すること（機械的連帯）と、一次分節間を横断して機能する汎部族的な諸制度（年齢組体系など）が存在することによ

る。部族レヴェルにある文化形態は、新石器革命後の多くの諸社会、現在でも単純な新石器のレヴェルに生きている諸民族集団（首長制をとっていないアフリカの諸社会を含む）にみられる。

首長制社会は、いくつかの地域集団を包含する永続的な政治構造の発達と、広域にわたる経済的プロセスの社会化によって、部族社会と区別される。社会の諸分節は分離的・対等・自律的ではなく、相互に序列化されている。

こうした首長制社会のあとに、国家社会が誕生する。

一九六八年に、サーリンズは「部族民」という著書をあらわし、ここで再び進化論的な図式にのっとって、けれどもここでは部族レヴェルに焦点をしぼって、理論的な考察を試みている。ここで興味深いことは、以前のバンド・部族社会・首長制社会・国家社会という四段階図式が、バンド・部族社会・国家社会という三段階図式になっている点である。すなわち、以前は区別されていた部族レヴェルと首長制レヴェルが、ここでは共に「部族社会」として一括されるのである。そして「部族社会」の一方の極に「分節的部族」が、他方の極に「首長国」がおかれ（以前の図式の部族レヴェルと首長制レヴェルにそれぞれ対応する）、実際の「部族社会」はこれらを両端とするスペクトルのどこかに位置づけられると考えられている。そしてその一般的な特徴として、親族組織の多機能的な性格と、生産・消費活動における「家族制生産様式」があげられている。

(2) 家族制生産様式の理論　1

「家族制生産様式」の理論は、進化論的な図式のうえで非常に抽象化された形で呈示された社会の類型を、現実の生態学的な環境とのかかわりの文脈に置きもどして考察する際に、重要な視角を提供する。この理論が明示的な形で扱うのは、生産様式と首長制における権力の生成との関連の分析である。（以下の要約は、Sahlins 1972 による。引用は邦訳 1984 より）

サーリンズによれば、家族制生産様式はその現象面において、「過少生産」によって特徴づけられる。「労働力は過少使用され、テクノロジー手段は完全に利用されず、自然資源は全部とりつくされてはいない」（P.56）というわけである。いわゆる「未開経済」において、テクノロジー手段が主としてマン・パワーに依存する簡素なものであることを考えるならば、焦点は「労働力の過少利用」と、それが投入される対象である「自然資源の過少利用」に向けられる。

「資源の過少利用」について、サーリンズは、様々なフィールドから集められたデータによってそれを例証しようとする。例えば焼畑農業に関してみれば、ニューギニア高地のチンブー族のナレグー分族は、平方マイル当り二八八人の平均密度にたっしているが、この密度は一般的な農業許容力の六四%をしめているにすぎない。南アメリカ熱帯林地帯の伝統的な農業は、ほぼ四五〇人の村落人口を養育できると考えられるが、実際には共同体の人口最頻数は五一人から一五〇人にすぎない。また、西アフリカのガーナについては、「中央森林地帯の人口密度は、臨界域にはるかにおよばない」というアレンの報告を引用する。こうした報告を検討した後にサーリンズは、「アフリカ、東南アジア、南アメリカなど、焼畑耕作民がすんでいる広汎な区域は、過少開発だと、権威をもって判定できる」（P.63）と結論づける。同様な「資源の過少利用」は、多くの狩猟採集社会や牧畜社会にもみられるという。

それならば「労働力の過少利用」についてはどうか。サーリンズによれば、これは「資源の過少利用」よりも民族誌学者の目を引いてきたし、したがってより容易に証明できる。レレ族やクン・ブッシュマンの社会では、男性の生涯就労期間は短く、若年労働力が寡少使用されている。また、性による分業にも、一般的にいって不均衡がみられる。「片方の性の利用可能な労働力が、不釣り合いにも社会の産出高のほんの一部を調達しているにすぎないこともある。」(P.69)。いずれにせよ多くの社会で絶対的な労働時間の少なさが観察されており、「生活資料部門での、男の標準労働日(繁忙期で)は、ベンバ族、ハワイ島民あるいはクゥイクル族ではたった四時間ほど、クン・ブッシュマンあるいはカパウク族では六時間ほど」(P.72)である。こうした社会では、「労働外」の時間は、儀式、気晴らし、社交、休養といった活動にあてられるが、これらの活動は、「(経済の)内部にあり、それにしたがって経済が組織されている、内在的断層にほかなら」(P.80)ず、こうした経済は「過熱にたいする安全装置を内蔵しており、具体的で限られた目的をもつ経済」(P.81)である。ならばその目的とは何か。それは「生産者の生計のための、使用のための生産」(P.83)をするということである。

これら二つの「過少利用」に続き、サーリンズのあげる三つの特徴は「家族制集団のかなりのパーセンテージが、きまって生産にくりかえし失敗する」という状況である。イバン族のある村に関する調査では、二五世帯中八世帯が、基準消費量の米を収穫できたに過ぎなかったという。一般には家族労働力は小規模であり、いくつかの家族においては、構成員にたいする労働者の比率が不利なものになっている。家族の成長サイクルの特定の時期において、どの家族もこのような状況に陥る可能性があるため、社会全体としてみるならば、必ず一定の割合の家族が生存の危機にたたされていると想定できる。

さて、現象面においてこのような「過少生産」および「生産における世帯の周期的失敗」をその特徴とする「家族制生産様式」の特質は、どのようなものだろうか。サーリンズによれば、未開社会における家族制集団は、中世経済における荘園、近代資本主義社会における会社に等しいその時代に支配的な生産=制度であり、「これらの制度はいずれも、特有のテクノロジーと分業、特徴的な経済目的ないしは究極目的、特有の所有形態、生産単位間の明確に限定された社会関係と交換関係、……をともなった、一定の生産様式をあらわしている」(P.91)。それならば、「家族制生産様式」の特質は、まずもって「生産様式」という分析的な概念を構成している上記の諸下位概念にそって、そのなかみを具体的に示すことにより、明らかにされねばならない。

サーリンズは、「家族制生産様式」の特質を、次の六点において示す。

1　分業

家族はそれ自体の内部にすでに分業の単位を含んでいる。すなわち婚姻により結合した成人男女である。「成人の男女の通常の活動が、共同で連帯して、社会の慣行的な労働を実際に全部やってのける」(P.94)という点で、性による分業は、他のあらゆる専門化をこえた、支配的な分業形態となっている。

2　テクノロジー

生産の過程において用いられる道具は、家族集団の誰もが用いることのできる単純なものであり、人工的な人体の延長物にほかならない。道具は、「それ自体のエネルギーや技術を解放するよりも、むしろ人

間のエネルギーや技能を解放する」（P.96）。だからテクノロジーの道具＝人間関係においては、人間（マン・パワー）の方に重要性がある。ここからサーリンズは、次のことを示唆する。すなわち、「原古的な社会では、経済発展に最もふさわしい戦略は、社会＝政治的圧力としてしばしばあらわれるはずだ、ということ」（P.98）である。つまり、このような社会で道具の簡素さが所与の条件であるとするならば、生産の向上はマン・パワーの動員にかかっている。すなわち、後に述べる、政治的圧力による「労働強化」が問題となってくるのである。

3　生計のための生産

「家族制生産様式」の目的は、「交換のための生産」に対する「使用のための生産」によって特徴づけられる。ここでサーリンズは、≪使用のための生産≫という概念に含まれる二つの解釈を区別し、概念をより厳密に規定する。一方で≪使用のための生産≫という概念は自給自足的な家族制経済を想定し、その結果「家族制アウタルキー」の状況、すなわち交換の不在という現実に反した仮説にみちびかれる。けれども、いかなる経済でも（「未開経済」でも）、交換は存在している。ここで問題となるのは、「（そのような「未開経済」における交換および≪交換のための生産≫も）生計のために行われるのであって、利潤のために行われるのではない」（P.99）という点である。「使用のための生産」という概念は、次のように規定されねばならない。「それは、たんなる≪使用のための生産≫（初めの解釈）であるだけでなくて、交換行為をつうじての、しかも交換価値の追求に対立するものとして、使用価値の生産にほかならない」（P.99）

近代資本主義に特徴的な、交換価値（量的に抽象的な富、貨幣）を追求する経済システムは、無限定な目標を設定している「交換のための生産」のシステムである。それにたいして「家族制生産様式」は、有限な目的をもつ経済システムである。その目的とは、使用価値の生産をつうじての自己の再生産であり、結局のところその生産は生計の維持に向けられているのである。

4　所有

「家族制生産様式」においては、各家族の資源への権限がある程度自律している。ここで「資源への権限」という場合、まず「所有権」あるいは「保有権」と、「使用権」を区別して考えねばならない。サーリンズによれば、首長、リニージ、氏族といった家族をこえる社会的構成体が、家族と同時に資源への「保有権」をもつ場合でも、それは「家族とその生産手段のあいだに介在しているというよりはむしろ、家族に累重されている」（P.110）。すなわち、そのような中でも、家族は「使用権」を享受し、生産資源との一次的関係性を保つ。また家族は、資源の使用のしかたやそこからあがる生産物の領有や処分のしかたも独自に決定できる。このような権利、すなわち「所有権をもつ集団や共同体の一員として家族が、社会資源の自分の分け前を、直接に独立して、自らの生活のために開発する権利」（P.111）こそ、「家族制生産様式」において各家族が社会資源に対してもつ権限である。

5　共同寄託

「家族制生産様式」では、家族内において財とサービスの共同寄託が求められ、それが各構成員に分配される（例えば、共食儀礼）。これは二重の意味をもつ。すなわち、これによって家族内では性や年令にもとづいた分業の差異が廃棄され、連帯性が確認される。他方では反対に、分配の圏域の外にある他の家族との差異が認識され

る。

6　アナーキーと離散

このような生産様式をとる社会において、一つの生産単位が他のそれに対してとる関係とはどのようなものだろうか。こでサーリンズは、「近代社会にみられる分業による《有機的連帯》にたいする、産業化以前の社会の《機械的連帯》」というデュルケームの有名な定式にたちかえっているようにみえる。それぞれの経済単位は形式的には連帯しているのだけれども、それぞれが自己の範囲をこえることのない目的の充足をめざして、独自に機能している。生産単位間の機能的な調整を欠いているために、それぞれの単位間には不連続がある。それを一歩おしすすめるならば、異なった利害をもつ生産単位としての諸家族は、容易に離散してしまうといえるだろう。「家族制生産様式」を上記の諸特質によって規定するならば、このような生産様式にもとづいた社会は、その内部に離散的傾向とアナーキーをひめた脆くて崩れやすいものであると、理論的にはいいうる。このような社会はその内に矛盾をもつ。すなわち「反社会のうえに基礎づけられた社会である」（P.104）とサーリンズはいう。

さてここまでで、「家族制生産様式」による生産は、現象として過少生産を示すこと、そしてそれは、資源の過少利用と、労働の過少利用によるものであることを述べた。そして、「一定の家族が周期的に生産に失敗する」という点についても述べた。

次いで、「家族制生産様式」という分析概念を構成している諸特質について述べた。すなわちそれは、(1)　家族内における性による分業、(2)　マン・パワーに依存した単純なテクノロジー、(3)　家族の生計のための生産という限られた目的、(4)　家族が資源を独立して開発する権利、(5)　家族内における共同寄託であった。そしてここから、理論的に、(6)　このような生産様式のうえに成り立つ社会は、内部に離散的傾向をもつことが指摘された。「家族制生産様式」は、「反社会的」な生産様式である。

けれども、ここまででは分析の里程の半ばまでしか至っていない。「未開社会は、反社会のうえに基礎づけられている」（P.104）というレトリカルな言明の内に、すでに次の問いが現れている。すなわち「家族制生産様式」のもつ離散性はいかにして乗り越えられるのか、「社会」はいかにして可能か、という問いである。ひきつづきサーリンズの議論を追うことにしよう。

(3)　家族制生産様式の理論　2

「家族制生産様式」には二重の矛盾がある。まず第一に、それは家族制集団という脆弱な基礎の上に成り立っているため、生産力に限界があり、各世帯は生産の失敗という危機に陥りやすい。第二に、「社会」というより上位の構成体からみるならば、家族制集団は自律的であるために、離散的になりやすい。逆にいうならば、社会的結合は「家族制生産様式」にもとづく家族制集団にとって、外在的な拘束として現れる。しかしサーリンズによれば、第一の矛盾は第二の矛盾によって希釈される。すなわち、「生産の失敗」が「社会の出現」によって補われるのである。そして、「社会の出現」はまず「労働の強化」とそれによる「余剰生産物」の生産、そしてそれの他世帯への分配によって実現される。

サーリンズは「家族制生産様式」という概念のもつ数学的意味を、

「チャヤーノフの規則」に依拠することによって明らかにしようとする。これは革命前のロシアにおいてなされた小農家族に関する調査から、A・V・チャヤーノフによって導きだされたものである。これによると、「使用のためのある世帯生産システムがあたえられるとすれば、労働者一人当たりの労働強度は、家族制（世帯）における労働者数にたいする消費者数の比率に正比例して増大する」（P.120）。ここで、a．各世帯における生産物の消費量は各世帯の消費者数に正比例する、b．各世帯の生産物の収穫量は投入された労働の労働強度に正比例する、さらにc．各世帯の利用しうる土地資源は限定されておらず、d．労働力は各世帯内部の労働者のみに依存するということを前提するならば、「家族制生産様式」という概念にたいしてこの規則のもつ意味は明らかである。「生計の基準は、最大限に効率のよい世帯に照準して設定されるのではなく、むしろ大多数の世帯の到達範囲内のレベルに設定され、したがって、もっとも有能な労働力の中の一定の潜在力が徒費されている」（P.109）ということ、すなわち、消費者数に比して労働者数の多い世帯の消費者一人当たりに換算した作物の生産高は、消費者数に比して労働者数のもっとも少ない世帯のそれと等しく、したがって前者では（あるいは理屈のうえでは後者を除くすべての世帯において）、労働力が過少利用されている（あるいは、みずからの世帯の適正消費量以上には生産物を生産しない、そのために働かない）ということを意味するのである。

「家族制生産様式」をとっているとみなされる社会において、各世帯がこの理論上の直線の上に実際に配置されうるならば、各世帯はまさに「生計のための生産」という限られた目的にそって、労働力を過少利用しているといえるだろう。けれどもサーリンズは、北ローデシアのマズルー族と西ニューギニアのカパウク族のデータから、次のことを示唆する。すなわち、程度の違いはあるが、いずれにおいても、一方では理論上の直線の下に位置する世帯群があり、他方では理論上の直線のはるか上に位置する世帯群がある。これは何を意味するのか。直線の下に位置する世帯群は、世帯の生計を維持するために必要なだけの生産物を産出しておらず、飢えの危機にみまわれているということ、他方直線のうえに位置する世帯群は、余剰労働力を利用することによって、自己の世帯の生計の維持に必要とされる以上の生産物を生産しているということである。だからこれらの社会が、このような世帯間の不均衡にもかかわらず存続し続けることを考えるならば、後者から前者への余剰生産物の流れが、容易に想定できるであろう。事実マズルー族では、「（生産に失敗した家族は）まさしく他の家族に依存できることが前もってはっきりわかっていたからこそ、失敗できた」（P.133）のだし、カパウク族では「一方の端には、ビッグマンないしその志望者と一党が集まって、生産を突然活気づかせ……他端にはビッグマンを称賛し、他人の野心に甘んじて寄食する人々が集まってくる」（P.135）のである。

このように、「家族制生産様式」をとっているようにみえる社会においても、現実はその理念型から逸脱し、それに本来含まれているはずの離散的傾向とアナーキズムは矯められる。労働強化によって生産される余剰生産物の移転／贈与が、離散的な各家族集団間に楔を打ち、「社会」を出現させるのである。それならば、そのような労働の強化と余剰生産物の移転をうながすメカニズムとは何であるのか。

サーリンズはこの問いに、二つの答えを用意する。ひとつは親族システムであり、他は政治システムである。

親族システムは、二重のやり方で「家族制生産様式」の過少生産をはばむ。まず第一に、親族システムは、システムの構成要素間の相互性の義務にもとづき、労働資源のより多い世帯に労働強化の圧力をかけることができる。これによって余剰生産物が生産され、労働資源の少ない世帯に移転される。第二に、親族システムは、地域資源の集約的な開発をおしすすめようとすることにより資源の過少利用をはばむ。

このようにして、親族システムは「家族制生産様式」にある二重の矛盾（世帯生産の不安定性と社会の離散性）をのりこえる。けれども生産様式が家族制経済によるものである限り、「社会」と「世帯」の間の矛盾は存在し続け、危機的な状況において分節的な世帯間の割れ目が突如として明らかになるとサーリンズはいう。

未開社会が進化するにつれて、家族制経済の統制は、親族システムによるものから政治システムによるものへと移行する。後者の社会においては、権力をもつ首長が、家族制経済の自己本位性に対立して「公共の経済原則を、人格化」する。

「家族制生産様式」と政治システムの間の関係を、サーリンズは次のように述べる。「家族制生産様式に本来的な性向である、遠心的傾向を、政治が否定できるかどうかに、一切はかかっている。いいかえると、……所与の社会がその生産能力の限界までに近づいてゆけるかどうかは、次の二つのあい争う政治原理のベクトルとしてしめされるのである。すなわち、一方では、家族制生産様式にかきこまれた遠心的分散の原理……、そして他方では、階層制と同盟という卓越した制度がつくりだす社会的合意……の原理。」（P.152）

それならば、そうした「社会的合意の原理」をあらわし、「公共の経済原則を人格化する」権力者である首長は、その対極にたつ家族制経済にもとづく「アナーキーな社会？」の中から、どのようにして生まれるのだろうか。

サーリンズによれば、「（首長の政治的）権威組織は、親族制の次元とは区別されておらず、その経済的影響力は、親族機能の徹底化として、もっともよく理解できるものである」（P.153）。「親族制とは、相互性、相互扶助の社会関係にほかならない」（P.155）のであるから、「親族制機能の徹底化」とは「親族制のいっそう高い形態をいみし、したがって、相互性ときっぷのよさのより高い形態をいみするもの」（P.153）といえるだろう。

それならばなぜ、「相互性ときっぷのよさ」が権力者を生みだすのだろうか。それは、「贈与が返弁されないかぎり、貰い手は贈り手にたいして、用心深く敏感な関係を解消できない」からであり、したがって、「気前のよさが、……債務のおしつけ」（P.155）となっているからである。ここから、贈り手＝貰い手という経済的な関係が、リーダー＝配下という政治的な関係に転化する。

このように、原初的な首長制は、権力志向者自身の労働強化と余剰生産から始まる。権力関係という非対称的な社会＝政治的関係は、リーダーから配下になされる贈与と、それにより生ずる債務によって基礎づけられているのだから、それは「家族制生産様式」の枠を越え、その経済的内向性をのりこえて、機能を始めるのである。けれどもこのような首長制では、余剰生産物は首長世帯の労働強化（あるいは、自己搾取）によって得られるものにとどまり、したがってその限られた余剰生産物を贈与することによって権力の統制下におくことのできる社会的な範囲もごくわずかなものである。

ところで、このような原初的な首長制の対極に、他者の余剰生産を

搾取することによってなりたつ本来の意味での首長制がある。ここに、結果的には対称的な二つの権力形態をみることができる。一方では、自己搾取にもとづく余剰生産物を生産し、それを一方的に気前よく与えることで、個人的な尊敬を享受する首長。他方では、構造的にさずけられた指揮権をもち、民衆の余剰生産を搾取する首長。けれども、サーリンズによれば、この二つの権力形態は、共に権力の正当化のイデオロギーとして、その根底に、経済的な相互性をおいているという点で共通している。すなわち、一方では気前のよい贈与が権力の社会的不平等を打ち消す。他方では、民衆からの余剰生産物の搾取が、首長からの再分配によって相殺される。そしていずれもその基礎に、余剰生産物の贈与や分配をおくことで、「家族制生産様式」における労働強化と生産の刺激剤となっている。もっとも、それらが組織することのできる社会的な範囲は、かなりの違いがあるのだけれど。

さて、自己搾取によって権力を手に入れようとする原初的な首長の対極には、他者の搾取によって物質的な利益を手に入れる進んだ形の首長制度がある。けれどもサーリンズによれば、このような進んだ形の首長制にも限界が課されている。サーリンズは、ハワイの首長制を例にして、次のように述べる。「世帯経済にもとづいている首長の徴収権には、この社会の親族布置と合致した道徳的限界が課されている。……ある限界まで、首長は当然徴収すべき権利をもっているが、それをこえると、高圧的とみなされてしまう」(P.173)。このような限界をこえて搾取をおこなう首長は、反乱によって倒され、かわってより良い(気前のよい)首長が王位につく。このような反乱は、表面的には、有力首長とその各支配地区との争乱という形をとるが、その底には、自己の生計の維持を目的とする家族制生産様式と、その潜在的な生産力を開発して、社会を組織しようとする政治システムの間の、より本質的な角逐がある。だからサーリンズによれば、「家族制生産様式」という生産様式自体がのりこえられない限り、そこから現れた権力によって組織された社会も、生産様式にある離散的傾向によって、常におびやかされているのである。

さて、以上がサーリンズの家族制生産様式の理論についての概略である。当初の問題設定でも述べたように、サーリンズの議論は、1.生産様式という社会の「下部構造」からときおこし、そこから2.権力の出現と、それによる社会の組織化について説明しようとしている点で、ユニークな分析視角を提示している。すなわち、家族制生産様式の過少生産という特徴自体が、裏返せば余剰生産物の潜在的な生産力についてものがたっているわけであり、その潜在力を顕在化し、余剰生産物を贈与、または分配するところに、権力と社会の出現の契機があるとみるわけである。

ところで、こうした分析視角がその射程内においているいわゆる「未開社会」では、生産様式のありかたは、人々の形成する社会システムと、その環境である生態的システムの相互作用の結果として形成される二次的なシステムである生業システムのありかたによって、規定されているはずである。もしそうであるならば、サーリンズの仮説をこえて、それが提起する問題を探っていくひとつの方向として、生態的な環境と、それへの適応様式である生業システムが、サーリンズの提起した「家族制生産様式」の理念型に強いバイアスをあたえているようにみえる生産様式をもつ民族集団の、「社会」と「権力」について分析を加えてみることは、興味深い。これによって「家族制生産

様式」の理論の明示的な適用範囲をみきわめると同時に、それが権力、あるいは社会といった現象にたいしてもつより一般的な意味を、ネガティヴな形でより明瞭に呈示できると思われる。

次章以下、エチオピア西南部のクシ系農牧民ダサネチを事例として、以上のような分析を試みたい。

2　ダサネチの生業システムと社会

(1)　環境

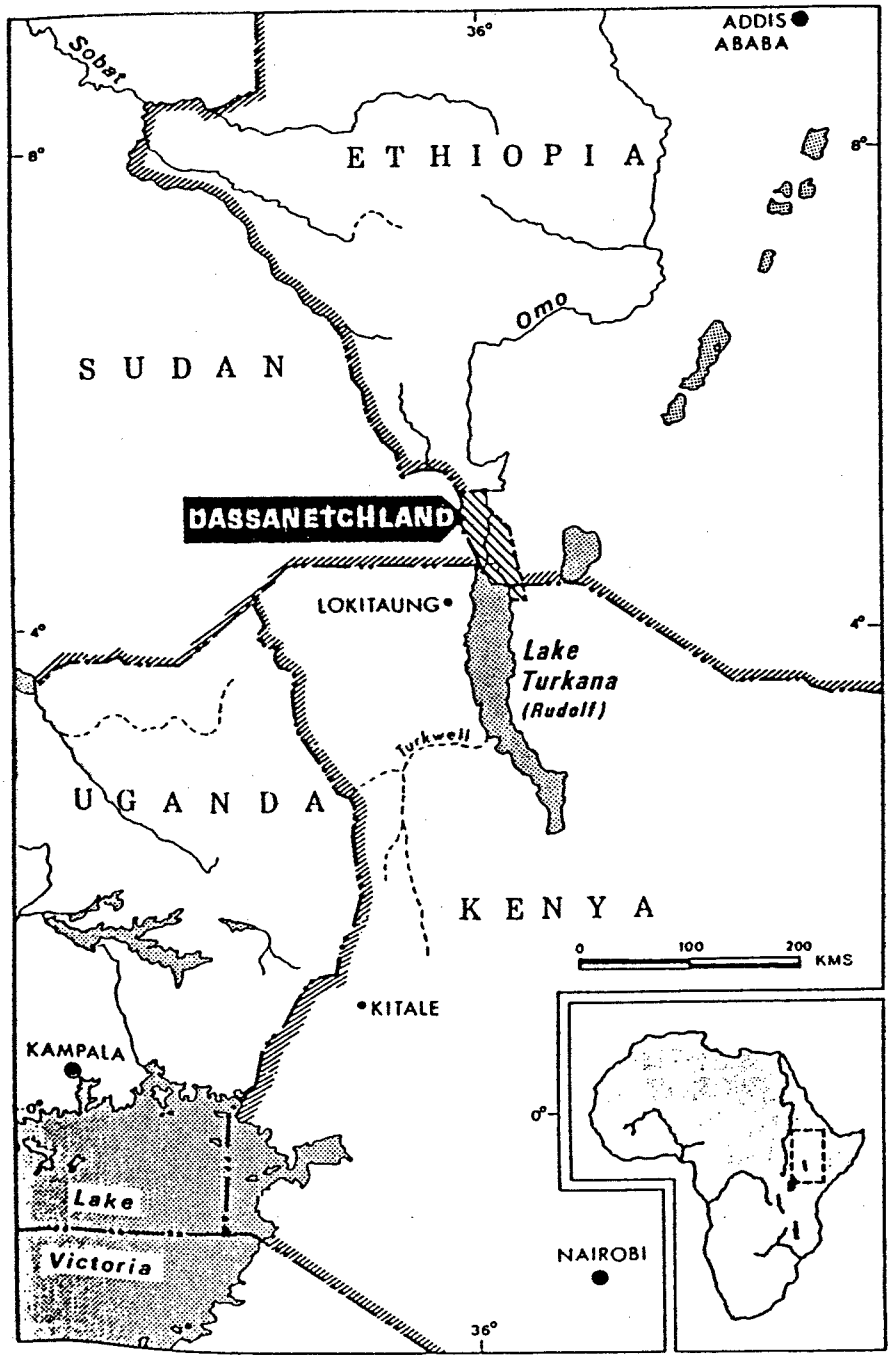
エチオピア高原に端を発し南へ流れるエチオピア西南部最大の川オモ川は、大きな蛇行を何回かくりかえし、やがてケニア国境付近でトゥルカナ湖に流れこむ。ダサネチ（Dassanetch）は、このトゥルカナ湖北岸、オモ川の河口に住む牧畜農耕民である。人口は約一五、〇〇〇人、そのテリトリーは北緯四度から五度の間、東経三六度に位置し、約二、三〇〇㎢の広さをもつ。住居地域の標高は三七五ｍで、半乾燥のサバンナ地帯である。降水量は年間二〇〇㎜から六〇〇㎜と少なく、しかも不規則である。しかし、毎年くりかえされるオモ川とトゥルカナ湖の氾濫によって肥沃な土壌が運びこまれるため、低地では耕作と牧畜が可能である。

ダサネチのテリトリーは、東西をリッジと丘にはさまれた平坦な細長い平野であり、オモ川によって東西に二分されている。東岸は西岸よりも低く、主たる冠水地域となっている。植生は豊富であり、農耕地として利用され、また、最良の牧草地でもある。西岸は東岸と異なり、雨によってしか給水されない。まばらなブッシュのはえる半乾燥地域で、主として放牧に利用される。ダサネチはこの西岸に住み、農

表１　年間降水量　1966－1972（㎜）

年	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
1966	－	－	－	－	－	0	1	65	35	0	31	0
1967	9	1	75	40	88	16	128	0	4	－	－	－
1968	2	131	35	11	0	13	0	－	0	－	－	－
1969	－	－	－	－	－	－	0	0	－	59	44	0
1970	45	45	42	140	19	0	0	1	0	15	1	24
1971	13	0	6	78	49	－	0	－	－	－	0	76
1972	7	15	20	82	46	49	0	0	22	62	69	6

図1　Almagor 1977 より



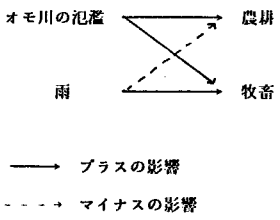
繁期にのみ東岸に移る。

オモ川では漁労も行われるが、ダサネチは一般に漁労を嫌い、農業と牧畜を尊重する。ことにダサネチは牛にたいして強い愛着をもっており、自らを牧畜民とみなしている。ダサネチ社会の経済は、こうした、オモ川河口に展開される農耕活動と牧畜活動のバランスの上に成り立っている。

(2) 生態的条件と資源の利用

ダサネチの主たる生業である農耕と牧畜は、二つの自然の要因によって規定されている。ひとつはオモ川の氾濫であり、他のひとつは雨である。

毎年くりかえされるオモ川の氾濫は、ダサネチランドの低地、ことにオモ川の東岸に、肥沃な土壌と水をもたらす。そのためオモ川東岸では農耕が可能になり、また豊かな植生とあいまって最適の牧草地を提供する。また雨季の雨は、オモ川の氾濫によっては冠水しないオモ川西岸に給水し、牧畜を可能にする。けれどもその雨は同時に、東岸で栽培される作物を損なうこともある。これらの二つの自然の要因と、二つの生業形態の関係を図示すると、次のようになる。



こうした自然の要因が、ダサチネの生業システムをどのように規定しているかについて、より詳しく検討してみよう。

I 農耕活動と自然の要因 1 (氾濫の不規則性)

オモ川は西南部エチオピア最大の川であり、標高二、〇〇〇mから三、〇〇〇mのあたりを集水域としている。エチオピア高地の雨を集めたオモ川は、南部の河口地域では、五月頃から水位の上昇が始まり、八月に最高に達し、氾濫する。この氾濫によって冠水する地域がダサネチの主要な耕作地となるのだが、これはいくつかの点においてかなり不規則である。

a. まず第一に、氾濫によって冠水する地域が年によってまちまちである。ダサネチが「低い川 (lower river)」と呼ぶ氾濫の年は、最も低い地域しか冠水しない。逆に「大きな川 (big river)」と呼ばれる氾濫の年は、広大な地域が冠水する。

b. 次に、水位の上昇と下降のタイミングが年によってまちまちである。水位の上昇の最も早いときは二月に始まり最も遅いときは十一月に始まる。

c. また、氾濫による冠水の期間も年によって異なる。最も短いときは二週間で終わるが、最も長いときは四カ月にもおよぶ。

d. そして、水位の上昇と下降のタイミングも(b)、冠水の期間の長さも(c)、冠水する地域の規模(a)を予測するてだてとはならない。

e. 以上のような年ごとの氾濫の不規則さに加えて、より長期的にみるならば、トゥルカナ湖の水位自体大きな変動をくりかえしている。バッツァーによるならば、一八九八年から一九五五年の間、デルタ地帯の湖岸は約六〇km後退し、デルタ地帯内だけでも八〇〇km²以上の土

表2　冠水の時期・期間・規模　1965－1971

年	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	規模
1965										♦♦♦♦♦♦			小
1966								♦♦					小
1967						♦♦♦♦♦♦♦♦♦♦♦♦♦							大
1968							♦♦♦♦♦♦						小
1969						♦♦♦♦♦♦♦♦♦♦♦♦♦							中
1970						♦♦♦♦♦♦♦♦♦♦♦♦♦							大
1971								♦♦					小

♦♦♦♦♦♦　最高水位の期間

地が現れた。ところが他方、一八八八年から一八九五年の間は二〇〇㎢の土地が浸水しており、また、一九六二年から一九六五年の間には再びおよそ三五〇㎢の地域が浸水した。

このように耕作適地は、年ごとの短期的な観点からも、よりいっそうの長期的観点からも、変動をくりかえしている。

ダサネチはオモ川の流れをコントロールできない以上、何らかのかたちでこうした氾濫の不規則性と予測不可能性に対処していかねばならない。

Ⅱ　農耕活動と自然の要因　2　（河岸台地と冠水低地）

ダサネチは氾濫による冠水地域を、diele と呼ばれる「河岸台地（river bank）」と、har と呼ばれる「冠水低地（inundated flat）」に区別している。「河岸台地」は川沿いにあり、川より高く、規則的に冠水する地域である。面積は小さい。それにたいして、「冠水低地」は、川や湖に近くなく、川よりも低い冠水地域である。水路により水を引き、面積は大きい。

冠水地域のこの二つの区別は、ダサネチの農耕活動にとって大きな意味をもっている。というのは、ダサネチの農耕牧畜サイクルにおいて、これらの二つの地域は、それぞれ異なった位置を占めているからである。

ダサネチの栽培する作物は、ソルガム、トウモロコシ、マメなどであるが、中でもソルガムは全穀物の80％を占める最も重要な穀物である。ソルガムは早期に播種し（八～九月初旬）収穫される（十二月～一月初旬）ものと、それよりも遅く播種し（十月～十一月）収穫される（二月～三月）ものがある。それぞれ二回収穫され、三度めに成長

して出てくる茎は、家畜の飼料として利用される。この早期および晩期というふたつの農耕活動の舞台は、それぞれ前記の「河岸台地」と「冠水低地」の区別に対応している。というのは、「河岸台地」は川よりも高い位置にあるため、水の引くのが早い。そのため早期の播種が可能なのである。面積が少ないため収穫もわずかだが、乾季直後の食物の欠乏している時期（ダサネチは「欠乏の月」という）に、貴重な収穫をもたらす。それにたいして「冠水低地」は水の引きが遅いため、播種および収穫も遅くなる。けれども雨季の前になされるこの収穫は、播種面積が広いため豊富な穀物をもたらし、ダサネチはしばらくの間「豊富な月」を過ごすことになる。

ところで、このような二種類の冠水地域で展開される農耕活動を規定するふたつの自然の要因がある。ひとつは言うまでもなく、オモ川の氾濫とそれによる冠水であり、もうひとつは、雨季の大雨である。冠水は、ソルガムの発芽に不可欠である。それと同時に、水が引かねば播種ができない。それにたいして、雨季に降る大雨は、主たる農耕地であるオモ川の東岸とデルタ地帯を沼に変え、作物をだめにしてしまう。だから、ダサネチの農耕期間と収穫は、この二つの要因によって左右される。すなわち、冠水の水の引きが遅いか、雨季の大雨の到来が早い場合、あるいはその両方の条件が重なった場合、農耕期間は短くなり、収穫は少ない。また言うまでもなく、氾濫による冠水の面積によっても、収穫は左右されるだろう。

前にも述べたように、こうした自然条件は、ダサネチにとって予測不可能である。それならば、この不安定な環境の中で、ダサネチはどのような適応戦略をとっているのだろうか。ここで重要になるのが、「河岸台地」である。

表3　農耕・牧畜カレンダー

	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
農耕					河岸台地			♦♦♦♦♦	◊◊◊◊◊◊◊◊◊◊◊◊◊◊			0000
						冠水低地				♦♦♦♦♦	◊◊◊◊◊◊◊◊	
	◊◊◊◊◊◊00000											
牧畜			←		西岸での放牧						→	
	東岸での放牧 →											←
食糧		豊富				／			欠乏			

♦♦♦♦♦　播種期　　◊◊◊◊　成育期　　0000　収穫期

「河岸台地」は、ダサネチの生計活動において、次の点で重要である。

a．「冠水低地」での農耕は、年ごとに異なる冠水と大雨の時期に左右される。「河岸台地」は比較的規則的に冠水するし、水の引きも早い。そのため早期に播種および収穫ができ、大雨の影響も受けにくい。従って、不安定な「冠水低地」での農耕の「保険」となる。

b．農耕活動に用いられる労働力は、世帯内でまかなわれる。（ダサネチの世帯は、男とその妻及び子供達からなる、二世代の核家族である）。広域の「冠水低地」での農耕活動は、労働力の少ない世帯にとって過重な労働となる。そのため、晩期に播種、収穫される穀物の半分も、住居に近い「河岸台地」で栽培される。

c．「河岸台地」は、乾季の最も食糧の欠乏している時期に、早期に植えられたソルガムの収穫をもたらす。この収穫は量的には大きなものではないが、乾季中にあまり肉の与えられない女性や子供にとって、重要である。

d．「冠水低地」には、耕作地ばかりでなく、家畜の放牧地も確保されなければならない。こうした牧畜とのかねあいで、農耕活動の重点は、「河岸台地」におかれる。

以上のような理由で、ダサネチにとって耕作地としての「河岸台地」を確保することは、不安定な生態的条件のもとでの生存を確保するために、絶対に必要な条件となる。事実「河岸台地」には毎年、耕作地を求めて世帯が集中する。それならば、面積の少ない「河岸台地」を、ダサネチの各世帯に分配する社会的仕組みは、いったいどのようになっているのだろうか。これが次の興味深い問いとなる。けれどもこの問いに答える前に、ダサネチのもうひとつの主要な生業である牧畜に目を転じてみよう。

Ⅲ　牧畜活動と自然の要因

ダサネチは一人あたり三～四頭の牛と、九～一〇頭のやぎ、羊などの小家畜をもっている。ダサネチ全体で合計すると、牛は四五、〇〇〇～六〇、〇〇〇頭、やぎ、羊は一三五、〇〇〇～一五〇、〇〇〇頭にものぼる。一方、二、〇〇〇㎢あるダサネチランドの大部分はツェツェバエが棲息していたり、泥沼や湿地であったりする。だから牧畜が可能な地域における家畜の密度は、かなりの高さになる。それに加え、ダサネチには牛疫や旱魃の記録がなく、家畜は年の半分は新鮮な牧草を食べることができるので、増加率が高い。このような多数の家畜は、利用可能な放牧地に強い圧力をかけ、土地の疲弊をもたらしやすい。こうした過放牧の危険を避けるため、ダサネチは二つの方法を用いている。

ひとつは、様々な機会に家畜を屠殺して、家畜の個体数を減らすやり方である。アルマゴールは、ダサネチにおける家畜の屠殺の機会を、儀礼的－世俗的、共同的－非共同的（各世帯別）の二つの軸の交差によって形成される四つの場合に分けて考察している。しかしいずれにせよ、家畜の屠殺が義務的である場合は少なく、多くの場合は何らかの口実を設けては家畜が屠られ、食べられる。そしてこうした屠殺は、穀物の貯えがそこをつく乾季（ダサネチの言葉では「欠乏の月」）にひんぱんになされる。

過放牧の危険を避けるもうひとつのやり方は、季節毎に家畜の群れを移動させるというものである。この移動は、たいへん複雑である。

ダサネチは雨季を、三～四月を大雨（big rains）、十～十一月を小雨（small rains）として区別している。大雨の後、家畜とそれを追う人々は、オモ河西岸を西へ向かう。ダサネチはこれに続くオモ川西岸

での牧畜のシーズンを三つに分けている。

大雨に続く四月から五月にかけての時期は、「新鮮な牧地（fresh pastures）」と呼ばれる。この時期は草も水も豊富である。牛は一〇～一五頭の、小家畜は四〇～五〇頭の群れに分けられる。一つの場所が過度に利用されないように、群れの移動はすばやく行われる。

続く六月までの時期は、新鮮な牧場と乾燥した牧場が入り混じるので、「混合（mixture）」と呼ばれる。家畜はさらに西に向かい、水場のまわりで放牧される。

七月、八月、九月の乾季の三か月は、「乾燥（dryness）」と呼ばれる。家畜と人々は牧草を求めてさらに西に向かい、ほとんど国境近くまで達する。水場は遠いので、一日おきに水場と牧草地の間を往復する。反対に、乳牛や毎日水を必要とする子牛の群れは川に向かう。成牛を世話する若者達からなるキャンプ（家畜キャンプ）は、牧草地の近くに設営される。また、実際の家畜の所有者たちは、家畜キャンプとオモ川東岸の居住地の間にベース・キャンプを設営する。

十月から十一月にかけての小雨の季節が過ぎ、十一月の半ばになると、牛の群れはオモ川を渡って東岸に向かう。オモ川の氾濫によって冠水しながら、耕作には用いられていない地域は、緑の牧草地となっている。また、ソルガムの収穫の終わった後の畑も、牧場として利用される。再び大雨のやってくる三月までのこの時期は、オモ川の東岸では農耕と牧畜が平行して行われる。

ダサネチは、こうした季節毎の家畜の群れの移動を、様々な種類の牧草を最も有効に利用するためだと説明する。家畜は単に小さな群れに分けられるというだけではなく、成牛の群れ、子牛の群れ、やぎの群れ、羊の群れというように、その性質によって分けられる。そしてそれぞれの群れの性質に応じて、移動のパターンも異なってくる。例えば、牛は草のうえのほうを食べるが、やぎや羊は根っこまでかじって引き抜いてしまう。だからこれらの小家畜よりも前に、牛は放牧される。また小雨の時期の後、小家畜はオモ川を泳ぎきることができないので、牛の群れのみが東岸に渡る。けれどもアルマゴールによれば、家畜を小さな群れに分けて、その時々の必要に応じて牧草を求めて移動させるこうした移牧の形態は、過放牧の危険を避けるのに役立っているという。なぜならば、小さな群れは容易に移動させられるので、一定の土地を過度に利用するということが起こりにくいからである。

さて、どちらの解釈をとるにせよ問題になってくるのは、こうした複雑な移牧の形態を維持していくのに必要とされる労働力の問題である。

二つの雨季の間、西岸で牧畜がなされているとき、人々はそれぞれの家畜の群れを追って、小人数の家畜キャンプやベース・キャンプに別れて住んでいる。オモ川の西岸台地にある住居とこれらのキャンプの間には、穀物、肉、ミルク、労働力のはんさなやりとりがある。このような複雑な牧畜形態を各世帯が独立して維持していくのに、二世代核家族であるダサネチの世帯内労働力のみでは、様々な困難が生ずるだろう。こうした労働力の不足は、農耕と牧畜が東岸で平行して行われる十一月から二月にかけていっそう顕著になる。「農耕と牧畜は、それに利用される土地よりも、投入される労働力をめぐって競合している。そこでの成功は、一方の活動から他方の活動へとすばやく労働を転換する能力にかかっている。」（P.50）とアルマゴールは述べている。

ここまで、ダサネチのおかれている生態的環境と、その中で展開されている生業システムである氾濫原農耕と移牧について検討を加えた結果、次の二つの問題が明らかになった。

a．ダサネチは牛に強い愛着をもち、自らを牧畜民であるとみなしているけれども、オモ川の氾濫を利用して行う農耕は、彼らの生存にとって必要不可欠である。この氾濫原農耕は、オモ川の氾濫の規模、時期、期間および雨季の大雨の時期によって規定されている。ところが農耕活動を規定するこれらの自然の要因は、非常に不規則であるうえに、予測不可能である。こうした不規則性、予測不可能性に対処するために、ダサネチは冠水する地域を「河岸台地」と「冠水低地」に区別する。「河岸台地」は面積は少ないが、比較的コンスタントに冠水し、しかも水の引きが早い。だから「河岸台地」での農耕は、面積が大きくて収穫も多いが、より不安定でもある「冠水低地」での農耕活動に対する一種の「保険」となる。このように「河岸台地」はダサネチの各世帯にとって欠くことのできない貴重な社会的資源であり、事実毎年この資源を求めて「河岸台地」に世帯が集中する。それならば、この貴重な資源は、それを求める各世帯の間に、どのような仕組みで分配されているのだろうか。これが第一の問題。

b．ダサネチのもうひとつの主要な生業システムである牧畜は、利用可能な牧草地に対して家畜の数が多いため、過放牧の危険をはらんでいる。その危険を避けるため、家畜は季節毎に小さな群れに分かれて、複雑ですばやい移動をくりかえす。けれどもこうした移牧は多くの労働力を要すうえに、農繁期には農耕活動との間で労働力をめぐる競合を引き起こす。ダサネチの各世帯は、こうした労働力の不足をどのようにしてカヴァーしているのだろうか。これが第二の問題である。

さて、ここまででひとまず自然の生態的条件とそこに生活する人々の相互作用の結果形成される生業システムの記述を終え、次節以下、そこから引き出された上記の二つの問題にそいつつ、その生業システムを稼動させている人々がどのような形で社会的に組織されているのか、つまり、労働力の分配や資源にたいする権利の分配といった問題を含む「生産様式」のありかたについて立ち入って考察を進めたい。

〔つづく〕

注

①以下のダサネチの生業および社会に関する記述は、Almagor［1977］による情報を、筆者が本稿の問題設定に沿って再構成したものである。

参考文献

Almagor, Uri, 1978; Pastoral Partners: affinity and bond partnership among the Dassanetch of south-west of Ethiopia. Manchester University Press.

Butzer, Karl W. 1971; Recent History of an Ethiopian Delta: The Omo River and the level of Lake Rudolf. The University of Chicago, Department of Geography, Research Paper No. 136.

Sahlins, Marshal and Erman Sarvice eds. 1960; Evolution and Culture Ann Arbor, University of Michigan Press.(山田隆治訳「進化と文化」1976年)

Sahlins, Marshal, 1961; "The Segmentary Lineage: an Organization of Predatory Expansion" in American Anthropologist 63.

Sahlins, Marshal, 1968; Tribesmen. Prentice-Hall. (青木保訳「部族民」1972年)

Sahlins, Marshal, 1972; Stone Age Economics. Chicago: Aldine-Atherton.

（山内　訳「石器時代の経済学」1984年）